



TITLE:

タイワンザルの社会性ならびに行動型の研究(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

川村, 俊蔵

---

CITATION:

川村, 俊蔵. タイワンザルの社会性ならびに行動型の研究(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1989, 19: 70-70

ISSUE DATE:

1989-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163884>

RIGHT:

濃度を測定する予定である。

## ニホンザルにおけるコドモ期の社会関係の縦断的影響

田中伊知郎（東大・理・人類）

昭和59～63年の4年間、長野県下高井郡山ノ内町地獄谷野猿公苑の志賀A-1群を対象に、母子（主にコドモ）に対する個体追跡法を用いて、母子関係を中心にして、ニホンザルの成長と社会関係を調査してきた。昭和63年度共同利用研究では、4才までの個体史を把握した個体の追跡を継続し、社会関係の個体差が、ワカモノ期以降の社会関係にどのように影響するかを調査した。

新生児期（生後一ヶ月以内の赤ん坊がみられる時期、5月～7月）の調査において、4才雌の出産は見られなかったが、3、4才の未産雌が赤ん坊を世話することがほとんどないという前年までの研究結果を確認した。

昭和63年の交尾期（11月）には、個体追跡してきた4才雌のうち2個体が初めて発情し、遊び等の交渉が多かった3才雄（1才年下）を相手にしていることを観察した。その場合、コンソートの相手は、2、3日継続して同じ個体であった。しかし、志賀A-1群においては、6才での初産が多いので、今回の性行動が妊娠出産につながる可能性は低い。故に、上述のコンソート関係が子供の遊びの延長にあるのか、繁殖につながるものであるのか今回の共同利用研究では、はっきりしなかった。この点を明らかにするために、平成元年の交尾期に個体追跡してきた5才になる雌の交尾相手を観察し、初産につながる配偶者を明らかにしたい。もし、5才の雌が出産した場合は、その母子関係及び交尾相手との関係を調査し、出産以前の社会関係の母子関係に及ぼす影響を明らかにしたい。

## タイワンザルの社会性ならびに行動型の研究

川村俊蔵（京都大学）

台湾での研究を除き、タイワンザルの国内研究の初年度の今年、伊豆大島で野生化したサルに集中し、餌育ザル観察の余裕がなかった。予備調査を含めて実観察日83、出合い163回、接触約87時間と、純野生としては効率のよい方であった。

1939年の脱走から約50年を経た現在、拡散源の大島公園を中心に、東海岸沿い13km長、9.3km<sup>2</sup>の、狭長な分布域に、11群を確認し、他に数群の存在を予想する。西海岸にも小さな飛地があり、2群程度いるようだ。大きな群れでは30頭余り、10～15頭のものが多くようだ。3頭以下のオスグループ、多数のソリタリーをも認めた。

主生息域北半の、7タイプに分けた植生図を作ったが、そのひとつスダジイ純林は、3.1%の面積だが、出会い率で71%を占め、依存度が極めて高い。一方火山性荒れ地と灌木林も、合せて4.2%の利用率があった。

調査の後期に、それまで工事中であった防災用金網で被覆された斜面に、1群が定常的に現われるようになり、この群れ（Ha群）が、オトナオス2、オトナメス5、コドモ8、アカンボ1から成る（計16）ことがわかった。この群れの生息域は10ha未満で、台湾の墾丁公園での例とよく似ている。また大島公園西のシイ林では、ほとんど毎日、群れ2つが、互いに100m余の距離で夜を過ごし、さらに2つの群れが接近することがあって、許容と拮抗両様の群間関係が観察された。

行動面ではニホンザルとの差が目立ち、木揺すりにガ・ガ・ガ音声を伴わないこと、警戒一威嚇にメス・コドモがよく参加し、数頭同時に発声することが多いこと、生後半以後でも、アカンボが必ず母オヤの腹側に付いて運ばれることなどがあり、これらが台湾での観察と一致することがわかった。

## C. 資料提供

数種薬物によるニホンザル虹彩平滑筋に対する作用

橋本吉弘・梁 信元・渡辺 稔  
(名市大・薬・薬品作用)

各種哺乳類虹彩平滑筋はコリン作動性薬物、アドレナリン作動性薬物、タキキニン類、プロスタグランジン（PG）類に対して様々な反応性を有し、その薬物感受性は動物種により大きな差があることが既に報告されている。本研究では摘出日本ザル虹彩縮瞳筋のこれらの薬物に対する反応性について検討した。実験にはリング状の標本を用い、その等尺性張力変化を記録した。